

わたくしたちと歴史の研究

— 田中陽児『世界史学とロシア史研究』によせて —

Reconsideration of TANAKA Yōji's Attitude to the Study of History

浅 野 明

ASANO, Akira

キーワード：田中陽児, 史的唯物論, 世界史, ロシア史

key words : TANAKA Yōji, Historical materialism, World history, Russian history

はじめに

歴史の研究・教育に携わる人たちにも、さまざまなタイプがある。一見すると瑣末と思われるような事象に沈潜し、根気強く史実の再現に努めるタイプ、大きな構想をもち、長期的な展望を踏まえて長い時間枠で歴史像を描くことを得手とするタイプ、理論的な考察に秀で、込み入った史実を論理的に整序することをもって使命とする人たち、多種多様な研究史を詳細に跡づけ、その作業をとおして論点を整理することで自らの歴史像の再構成を試みる人たち、そして種々の工夫を凝らして、研究成果の伝達と教育に人生をかける人たちなどなど、いずれも歴史の研究・教育を支える貴重な個性であり、そこに優劣などつけるべきではなかろう。歴史の研究と教育は、いわゆる「第一人者」のみにによって担われているわけではなく、これらそれぞれに個性的なすべての人びとによって牽引されているのである。しかし、西洋史家の田中陽児氏(1926-2002)は、これらのいずれのタイプとも異なる独自の位置を占めた歴史研究者であり、教育者であったように思われる。しかしこれは、氏が特別の研究方法をとったり、何かしら華やかな活動を展開したということの意味

しない。むしろ反対で、氏が語り続けた事柄は、およそ耳目をひくものであったとはいえない。しかし、その発言は常に歴史研究者のとるべき基本的な姿勢を鋭く問うものであり、研究者のみならず、歴史に関心をもっている多くの人びとにとっても、決して他人事ではない重要な問題提起を含んでいた。このような、目に見える直接の成果が得にくい論考が広範な人びとに受け入れられることはあまりないかもしれないが、提起された問題が本質的で重要なものであれば、それを真剣に学ぼうとする人びともまた必ずいる。田中氏が亡くなってからすでに10年以上の歳月が流れているなかで、氏と親交のあった諸氏によって、その主要な論考があらためて1書として編まれたという事実が、田中氏の業績がいまなお価値を失っていないことを証しているであろう。それが、田中陽児『世界史学とロシア史研究』(山川出版社、2014年10月。以下、本書)である。小稿は、本書から田中氏の思考を再構成し、それをてがかりに、わたくしたちの今後の歴史の研究と教育について考えてみることを目的とする。

まず、編者によって編まれた本書の構成を以下に掲げておこう。なお、参考までに、論

考が公刊された年代も付記する。

第Ⅰ部 中世・近世のロシア — 課題と方法

ニコンの「宗教改革」— ロシアの帝権と教権の一断面 (1961年)

ノヴゴロド「民会」考 (1963、64、65年)

モスクワ国家論の一類型 — 「18世紀の秘密外交史」小考 (1967年)

キーエフ国家における正教の国教化 — その状況と論理 (1969年)

「ロシア農民戦争」論の再検討 — ソビエト史学の新動向をめぐる (1974年)

1382年の汗軍モスクワ襲撃考 — ドミトリ大公とモスクワ蜂起 (1975年)

П. М. ストロエフの史料探査行 — ロシア近代史学成立の一前提 (1986年)

第Ⅱ部 歴史の見方 — 世界史学への展望

歴史と絵画 (1956年)

歴史のなかの人間像 — 歴史家は人間をいかにとらえるか (1960年)

歴史認識の現代的時点について (1961年)

思想史研究の論理化のために (1963年)

ソビエト史研究の二、三の問題点 — 1963年度ロシア史研究会大会報告をめぐる (1964年)

私にとってのロシア史研究会 (1967年)

歴史学と「世界史」教育 (1971年)

ロシア史研究会大会雑感 — 第一次ロシア革命 (1972年)

レーニン論についてのコメント二、三 — 初期レーニンの諸問題 (1972年)

人間の顔をした歴史研究を (1990年)

第Ⅲ部 ロシアを読む — 書評その他

〔書評〕

ヴェーラ・フィグネル著『ロシアの夜』

(1961年)

松田道雄著『ロシアの革命』(1970年)

和田春樹著『ニコライ・ラッセル』上・下 (1973年)

国本哲男著『ロシア国家の起源』(1978年)

B.O.クリュチェフスキー著『ロシア史講話』第一・二巻 (1981年)

鳥山成人著『ロシア・東欧の国家と社会』(1986年)

栗生沢猛夫著『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー』(1998年)

『ロシア史研究』編集後記 (2編1962年、1編1965年)

田中陽児氏の人と学問 (和田春樹)

解題 (豊川浩一)

初出一覧

略年譜

著作目録

みられるように、本書は大きく3部構成をとっている。第Ⅰ部は中世・近世ロシア史に関する専門論文であり、第Ⅱ部は歴史研究と歴史教育および世界史認識のあり方について考察した諸論考、そして第Ⅲ部は書評その他の論考からなる。それぞれについて、各論考が発表年代順に配列されているのが一つの特徴といえよう。これは、編者4氏の連名による「はしがき」によれば、「田中陽児という歴史家の思考の跡を辿りながら読むのが最も良いだろう」という配慮による。「思考の跡を辿りながら」という本書の構成は、田中氏の思考を再構成しようとするわれわれにとって大いに助けとなろう。

本書の書評であれば、第Ⅰ部の冒頭から各論考の梗概を順次紹介し、そのあとで若干の

論評を加える、という形式を踏むことになろう。だが、小稿は本書の書評ではない。その理由はいくつかある。まず、本書所収の諸論考は内容豊かであるのみならず、論点也多岐にわたっており、小稿の筆者の力量では、書評としての統一的な叙述をおこなうことが難しいという事情がある。また、第Ⅰ部を構成する諸論考は、いずれもすでに評価の定まった論文であるうえに、編者の一人である豊川浩一氏が、近年の研究動向を踏まえて、簡潔にして要を得た解説を提供しており、小稿の筆者が付け加えるべきことはほとんどない。一方、第Ⅱ部の論考は、いずれも歴史および歴史教育に関連する本質的な問題を論じており、歴史の研究・教育に携わる人びとに広く読まれるべきものであるにも拘わらず、本書による以外には容易に接することができない論考を含んでいる。そこで小稿では、主としてこれら第Ⅱ部の論考について検討を試みることにしたい。これらはいずれも、ある状況を前提にした具体的かつ実際的な問題に沿って執筆されており、個別に内容を紹介するとすれば、その背景にまでさかのぼって言及しなければならない。これはきわめて煩雑な作業となるだけでなく、当事者ではない小稿の筆者にはそもそも実行が困難である。しかしこれらの論考にあっては、仮にその背景となる事実について知見が不十分であったとしても、その本質的な部分を理解することは十分可能である。本書が公刊されたのも、編者に同様の判断があったからであろう。ここでは、各論考の内容紹介は最小限にとどめて、それぞれの論考に共通する重要な論点を探り出し、それをもとに田中氏の思考の再構成を試みることにしたい。第Ⅰ部および第Ⅲ部所収の論

考については、必要な範囲で言及するだけにとどめざるを得ない。なお、小稿の末尾に、関連する略年表を付した。

I

1. 本書巻末の略年譜によると、田中氏は1926年1月7日に東京で、在野の歴史家田中惣五郎氏の長男として生まれた。このころ、ヨーロッパでは、ドイツの国際連盟加盟(1926)や不戦条約の締結(1928)など、世界大戦後の平和を求める動きがみられる一方で、イタリアとドイツでファシズムの台頭があり、政治情勢は大きく動き始めていた。中国でも国民党による北伐の開始(1926)という政治の新たな展開がみられ、日本も三度にわたる山東出兵(1927、28)でこれに応えた。わが国は、すでに1925年に普通選挙法と治安維持法を抱き合わせて制定しており、帝国主義政策を推進するための国内態勢を整えていた。それから敗戦(1945)にいたるまでの20年余りの歴史について、ここであらためて語る必要はないだろう。その後、田中氏が歴史の教師あるいは研究者としての仕事を始めた1950年代の半ばから、職を退いた1996年までの40年あまりのあいだに、わが国とこれを取り巻く世界の情勢は幾度か大きな変化を経験してきた。しかし、これらの変化にも拘わらず、歴史あるいは歴史の研究に臨むときの田中氏は、終始一貫した独自の視角と問題意識を堅持していたように思われる。小稿の最初の課題は、田中氏が一貫して追求していたその視角と問題意識を明らかにすることである。氏が追求する歴史あるいは歴史研究とは、そもそもどのようなものだったのであろうか。まずここから検討を始めよう。

2. 本書に収められたなかで最も初期の論考

は、1956年に公刊された「歴史と絵画」(1956年、本書261-275頁。以下、同じ)である。この年の2月にはソ連共産党第20回大会でフルシチョフ第一書記によるスターリン批判がおこなわれ、また3月には亀井勝一郎氏の「現代歴史家への疑問」(『文藝春秋』3月号)が公刊されて昭和史論争が始まっている。大きくみれば、この1956年前後を境に、敗戦後に高揚した社会全般における民主化・変革の機運がしだいに反転し、その動きのなかで歴史学界も方向性を見失い、ある意味で混迷した状況に入っていく。田中氏が、歴史の教師および研究者としての仕事を始めたのは、この頃のことであった。この論考のなかで田中氏は、世界史学習の「目標はあくまでも、歴史像の再構成による未来の行動と思考の指針を確立することである」(263頁)、あるいはまた、「歴史学習の最高プログラムが、現実に根ざした統一的な、豊かな歴史像の形成(未来への確信と行動指針、すなわち、かくありき、ゆえにかくあらねばならぬ)である」と述べていた(264頁)。これらはいずれも、世界史学習の一環としての現代史の学習・教育方法を論じるなかでの発言であるが、氏の求めている歴史教育と、それを支えるべき歴史学のめざすところを表現していると考えていいだろう。一方、本書に収められたなかでもっとも新しい論考「人間の顔をした歴史研究を」(1990年、358-363頁)は、1989年11月にベルリンの壁が崩壊した直後の1990年3月に公刊されている。これは『歴史学研究』誌上でおこなわれた「リレー討論：地域史と世界史のあいだ」のなかの1編として書かれたものであるが、氏の論考はテーマをはるかに超えるものとなった。小稿の筆者の理解でその

骨子を組み立てれば、次のようになろう。¹⁾

歴史の原動力は、与えられた諸条件と、そのなかで主体的に活動する人間とのあいだの葛藤である。職業的な歴史家は、自分たちが歴史の真実を突き止めると自負しているが、「無名の民衆(=歴史の現場で生きてきた人びと)」は多くの場合、何らの史料も残さない。つまり、史料があればそれである程度明らかにできることと、そうではないこと、つまり歴史家が主体的な問題意識をもって歴史に働きかけないかぎり明らかにならないことがある。このことを改めて確認したうえで、現代における歴史家の意義や役割を、もう一度考え直す必要があるのではないか。

このように、氏の議論は歴史と歴史家の関係という根源的な問いに向かっている。議論はこのあと、歴史家という「歴史認識の個性」の問題にまで及ぶのであるが、これらの考察に、ベルリンの壁崩壊が田中氏に与えた影響をみることができよう。この出来事を契機に、田中氏は、歴史と歴史研究についてのみずからの認識を、いまいちど検討する必要があると考えたのである。しかしながら、最初期の論考ですでに明示されていた歴史の教育・研究の目標を問うことと、最新の論考で語られた歴史家による歴史認識のあり方を問うというこの二つの課題は、最新の論考のなかで語られたもう一つの確認事項、つまり「歴史の被制約性と人間の主体的活動力の葛藤こそ、歴史展開の原動力」であるという氏の認識を核にして、「歴史と未来の展望」、「歴史のなかにおける人間の活動」、そして「歴史家の歴史認識」という、ひと連なりのいわば問題群を構成している。そしてこの問題群は、田中氏の歴史研究者・教育者としての40数年の

活動において、かわることなく一貫して氏の関心の中心を占めていたと思われる。

さらに、これらの問題群の基礎には、「歴史のなかの人間」という主題が、共通の底流としてあることをみのがしてはならない。それは、過去に生きた人びとの生を歴史のなかに位置づけ、当時の歴史状況を踏まえているという意味で、「正当な」評価を与えたいという、失われることのなかった田中氏の強い思いの反映なのであろう。この場合の人間とは、「無名の民衆」のことだけではもちろんない。後述するように、田中氏は、歴史に名を残した思想家や政治家、権力者にいたるまですべてひとしく、好悪やことの善悪にとらわれることなく、与えられた歴史的な条件のなかで生きた一人の人間の生として位置づけたいと考えていた。ちなみに、自らの研究の原点ともいうべきものについて、「少々大げさないい方になって気恥かしいが」と断りつつ、田中氏自身が、「学生の頃から、私は、変革運動に従事する人間および人間関係についての透徹した理解がほしかった。これは、昭和の非法時代からのそれを垣間見る境遇にあったことや、学生運動をふくむ民主主義革命の波濤が日本を洗っていた戦後数年の歴史的な現実のなかで体験したことが裏うちされていることはいうまでもない。」と述べ、「同志といい仲間といいしている者が、弾圧のひどさはあるにしても、何故、ああも簡単にくつついたり、はなれたりの離合集散をくりかえせるのか、何故、ああも簡単に大事をともし、対立し、憎悪し、たたかいあえるのか」という疑問が、いまだに解けない「素朴な疑問」、発酵しつづけている「私の大事な課題の一つ」とであると語っている（「私にとってのロシア史

研究会」1967年、305頁）。戦前・戦中の変革運動に身を投じた人びとと直接・間接に接したこと、そして戦後の激動の時代に歴史の研究と教育に携わったことによって、矛盾に満ちた存在である人間に対する関心、歴史学にひきつけていえば「歴史のなかの人間」という主題が、氏の終生かわることのない追求課題となったことがうかがえる。

ところで、前述した一連の問題群を追求課題とするのであれば、研究対象である歴史的社会的構造的把握と、そのなかで生きた人びとの主体的な活動の双方が等しく重視され、しかも両者が統一的にとらえられねばならない。そのためには、研究者の問題意識がきわめて重要な意味をもつことになる。こうして、「研究する主体」としての歴史家の認識あるいは自覚の重要性という、田中氏の諸論考に一貫して存在するもっとも基本的な要素が、前面にたち現れてくる。

II

1. 敗戦から十数年のあいだ、歴史学界において大きな影響力をもっていたのは、マルクス主義的な歴史認識、つまり史的唯物論に依拠する諸研究であった。これにも種々の立場がありえたが、基本的には歴史の発展法則を承認し、具体的な歴史事象の研究も、その中に位置づけられるべきものとされていた。このような歴史認識の広がりを支えていたのが、国内の政治情勢であった。周知のように、敗戦から数年のあいだ、わが国の歴史において前例のない大きな政治変革があった。いうまでもなく旧来の政治・社会体制の全面的な否定と民主化の過程であり、それはまた、後発資本主義国であったわが国のさらなる変革、つまり民主主義革命あるいは社会主義革命を

展望する大きなうねりを生み出していた。政治変革を求める多くの国民の熱意が、皇国史観や素朴実証主義にかわる、変革の展望を指し示す新しい歴史認識を要求したのは当然であった。マルクス主義的歴史認識は、その意味で当時の政治情勢に合致し、国民の新たな要求に応えるものでもあった。そのために、多くの歴史家が、「土台」である社会経済構造の分析に集中することとなり、その研究目標は、後発資本主義国における民主主義革命から社会主義革命にいたる運動法則の解明にあるとされた。これはたしかに時代の要請に応えるものではあったが、しかし一方で、歴史認識における客観主義を促進・助長することになった。政治体制の根本的な変革を志向するのであれば、現状分析と政治戦略が主観的なものであったり、偶然の要素に左右されるものであってはならず、そこに客観的な根拠が不可欠とされたからである。その意味で、客観性の強調は、ある程度やむをえないものでもあった。

だがこの傾向は、マルクス主義的歴史研究を、一つの隘路に引き込むことになった。歴史学の目標として、「未来への確信と行動指針の確立」を設定する田中氏にとって、史的唯物論は、当時の多くの人びとにとってそうであったように、変革の方向性を示すものとしてきわめて重要なものであった。その田中氏は、この間のマルクス主義史学の動向を、問題提起的に次のようにまとめている。氏によれば、「存在が意識を決定する」という史的唯物論の根本命題は、その後、一つには「存在が意識を規定する構造」に、もうひとつには「規定された意識が、逆に存在に対して行う働きかけ」の検討へと向かった。前者は「弁証

法の希薄な史的唯物論」を克服するための、後者は「素朴唯物史観のマンネリズム」を、それぞれ打破するための突破口として、「今日のわれわれにとって共通のスタートライン」であるとみなされる。しかし、前者は「社会経済史分析偏重の化石現象」を生み出し、後者は「社会科学諸部門の成果の性急な導入要請をうけて動揺している」のが現状である（「歴史認識の現代的時点について」1961年、285頁）。ではどうしたらよいのか。この現状に対応する緊急課題として、田中氏は、この否定的な現象を招来した「原理的根拠」を自覚的にとらえなければならない、とする。氏によれば、一方の「化石現象」と他方の「導入要請」とは、いずれも「『歴史的認識主体としての』研究者—われわれ—と、研究客体としての歴史現象との乖離」に由来しているのであり、それを打破する以外に隘路からの脱出口はないのである。ここにいたって、われわれは、田中氏の思考のもっとも本質的な命題に近づくことになる。

2. 歴史の研究にあたって、田中氏がもっとも重視し、首尾一貫して主張しているのは、研究者がみずからの位置と問題意識を自覚し（研究する主体）、同時に、研究対象である歴史事象（研究客体）とみずからとの緊張関係を自覚することの重要性である。しかも、前者も後者も、ともに具体的な状況に応じて流動するのは避けられないから、両者の関係もまた流動することを自覚しなければならないのである。このような田中氏の主張を、小稿の筆者なりにあえてわかりやすく比喩的に言い換えれば、次のようになる。「現在を生活しているわたくし」は、過去のある事象を研究しようとしているのであるが、その際、対象とのあいだに常に一定の

距離を保つように心がけねばならない。「わたくし」(研究主体)と「過去の事象」(研究客体)とが一体化してしまえば、主体と客体とが混同されてしまい、だれが、なにを研究しているのかわからなくなってしまうからである。そこで、対象とのあいだに距離をとることが必須になるのであるが、その際、対象に対して、どのような視角から、どのくらい離れて研究すればよいのかという距離感については、各自の判断に任されている。それぞれの考えで自由に行えばよいのである。しかし、現在の状況は不断に変化するから、「わたくし」の位置も多かれ少なかれ変化する。また「過去の事象」さえも、研究の進展などでその内容や意義が常に変化しうから、みずからをどう定置しようとも、お互いの位置関係もその距離感も、固定的ではありえない。みずからの位置が動いているのに、視角と距離感が以前のままなら、その研究結果はおよそ的外れのものとなろう。だから、「わたくし」は、「過去の事象」との距離のとり方、つまりいまの視角と距離が対象を研究するのにふさわしいかどうか、常に点検する努力を怠ってはならない、ということになる。

もし研究者が、この緊張関係とその流動性に無自覚であれば、その結果として、社会経済史であれ、思想史であれ、人物史であれ、およそあらゆる歴史研究が隘路に入り込むことは避けがたい。逆にいえば、歴史研究が何らかの混迷に陥っているとすれば、そこに、主体と客体との乖離、あるいはその反対に、両者の緊張関係を忘れた混同があるのではないかと疑ってみる必要がある。第Ⅱ部に収められた田中氏の論考は、多様な主題を扱っているが、そのすべての根底に、上述した自覚の強調と、それを忘れた歴史研究に対する

厳しい批判がある。

その際、氏の批判は、主として史的唯物論に向けられている。歴史研究の他の諸潮流については、必要な範囲で触れられるだけである。このことは、田中氏が、マルクス主義的な歴史認識を評価していなかったという意味ではまったくない。その反対である。すでに述べたように、田中氏は、将来の展望を与えるものとして史的唯物論の有効性を十分に認めていた。氏の批判は、法則性を追求することにこだわるあまり、みずからの問題意識や方法論を批判的に見直すことを忘れて隘路に入り込んでしまい、しかもそれを自覚することさえできなくなっている史的唯物論の現状に対して向けられているのである。氏によれば、「唯物弁証法を形而上学的に祖述し、史的唯物論を絶対精神のようにあがめる明敏さは、伝統的保守的思想の進歩的機能や革命思想の反人民性に対する鈍感さと表裏一体をなす」(「思想史研究の論理化のために」1963年、289頁)のである。そして、自らの研究姿勢について無反省なままに行われる革命史研究は、それが精緻になればなるほど「ますます愚劣で無意味なものになることがあり得る」(同上)。また、運動法則を重視するマルクス主義的歴史研究は、研究者の発想を窮屈な枠の中にはめ込んでしまうこともある(「ロシア史研究会大会雑感」1972年、350頁)。そこで、氏は「今日、われわれの周辺にみられるところの実証主義的な学風が、もっぱら歴史学の保守的側面を示す代名詞のように受け取られ、いわゆる進歩的歴史学がいぜん政治主義的な硬直をぬけきれずにいるのと好一對になっている状況は、歴史研究者にとって一体何を意味するのであろうか」と問題提起するのである(「思想史研究の論理化のために」289頁)。田中氏にとって、「事象の解釈

のためではなく、当該段階におけるもっとも戦闘的な体制変革の、それ自体イデオロギーであったところに史的唯物論の存在理由があった」はずなのである（「歴史認識の現代的時点について」286頁）。

3. さて、前掲の論考「歴史と絵画」（1956年）によりながら、現代史の研究を素材に、研究主体と歴史事象との緊張関係ということについて、田中氏の考えをもう少し具体的にみてみよう。氏の主張は、大要、次のようなものである。

歴史家が、研究主体としての自分自身と研究客体としての歴史事象のあいだの緊張関係を自覚する必要があるのはなぜなのか。それは、一つには、歴史を単なる「事実」の断片もしくはその羅列に終わらせるのではなく、なんらかの統一的な歴史像を描こうとするからである。その場合、描かれた統一的な画像が、現代人の目から評価した非歴史的でよそよそしいものであったとするなら、われわれはそのようなものから、「未来への確信と行動指針」を確立することができるだろうか。そのようなものが、「明日への希望と確信とを生み出す道標」（261頁）となるだろうか。現代の研究者が、研究対象に相対するみずからの研究姿勢をはっきり自覚してはじめて、現代と過去の歴史事象のあいだにある函数関係を解明することが可能となり、それこそが、過去の歴史事象を、現代人の目からみたものとしてではなく、当時の人びとにとっての生活現実として描くことを可能とするのである。

ここでのキーワードは、ひとつは「現代と歴史の函数関係」であり、いまひとつは「生活現実」すなわち「人びとの現実の生活」である。現代史研究を例に両者の関係を表現す

ると、「歴史を生活者の現実として共感・追体験すること」、「死滅した過去の中から、生活者の歴史をふるい出すこと」を意味し、それは、「われわれのいまある生活現実を歴史的に再構成する訓練」から生まれてくるのである。つまり、「生活現実は、現代史を通じて歴史に還流し、現代史は、生活現実をなかだちとして歴史の抜きがたい一環となる」。「逝ける過去ではなく、いまなお生命力をもってわれわれに語りかける過去を発掘するには、現在歴史的事象とみなされている対象の多くが、当時の人びとにとっては、抜きさしならならぬ生活現実であり、まさしく現代の問題であったのだ、という単純素朴な地点を固守することが必要なのである」（263頁。傍点原文。以下、同じ）。これを、再び小稿の筆者なりに解釈して言い換えれば、次のようになる。「研究者は、まず現代における現実の生活について、それを歴史のなかに位置づけて理解しなければならない（現代の事象を絶対視するのではなく、それを相対化できなければならない。「われわれのいまある生活現実を歴史的に再構成する訓練」）。その理解があつてはじめて、過去の歴史を生活者の現実として追体験することが可能となり（「生活現実は、現代史を通じて歴史に還流し」）、それができれば、今度はその結果をもって、現代の生活現実を歴史的に理解することができる（「現代史は、生活現実をなかだちとして歴史の抜きがたい一環となる」）、ということであらうか。あるいはまた、田中氏は同じことを言い換えて、現代史学習における歴史研究者の仕事は、「一見、錯雑混乱した「現代」のさまざまな生活現実を直視し、その背後にひそむ膨大な歴史的事象、過程、意義を抽出・分析することで

あり、これを通して、未来につらなるわれわれ自身の歴史像をくりかえし構成しなおす努力であろう。」とも述べている(261-262頁)。氏は、これをさらにつきつめて、端的に次のようにいう。つまり、よくいわれる「歴史の一環として現代をみる」という場合、その成否は、ここにいう歴史を教師がどれだけ深く理解し、認識しているかにかかっているのであって、「現実感覚の喪失は、しばしば、貧血した歴史観と関係があり、現代史への無関心は、平板な既製の歴史像にいいとしてやすんずる結果を生みやすい」のである(262頁)。

以上のことから明らかなように、歴史的な事象を研究しようとする場合、研究者(われわれ)は、みずからの位置を、研究対象(歴史的な事象)との関係で適切に定置すること(「われわれのいまある生活現実を歴史的に再構成する訓練」)が前提とならなければならないのである。

4. 上述のことを踏まえたうえで、さらに先に進もう。歴史家が自分と過去の事象との緊張関係を自覚するとしても、かれ自身はいえ、現代とのかかわりでしか歴史に対峙することはできない。前述した小稿の筆者の比喩でいえば、対象との距離と視角を決定するための判断規準は、かれ自身が現在おかれている状況や問題関心にしがうしかないからである。その場合、「未来への確信と行動指針の確立」をめざすなら、現状をどうみるか、その自覚的な認識が不可欠であろう。しかし、研究者が、その問題意識をストレートに歴史に持ちこめば、それはまた別の大きな問題を引き起こすことにならざるをえない。再び先の比喩でいえば、主体と客体の距離がなくなってしまうと、両者の一体化・混同が避け

られなくなるからである。研究者が、みずからの価値観や価値基準を歴史研究に無批判にもちこむことの不毛さについても、田中氏は繰り返し警告している。それは、自らの問題意識にまったく無自覚であることと同じ結果をもたらすことになるからである。氏の言葉をそのまま引用すれば、「過去を追求する場合、現在何がどれだけできるかという問題の函数としてしか、かつて何がどうであったかをえぐり出せないという宿命のようなものがあって、そのえぐりだしの角度と深さを規定してしまう。いいかえれば、どれほど自覚的に、いまの視点を排除しようとしても、過去は、いまのプリズムを通してしか見えないのだとしたら、無自覚にいまの視点をストレートにもちこんだ場合には、はたしてどれほどのアナロジー的論理の横行が見られることか、想像しただけでも、その面白さと不毛さは予測できるのである」(「ソビエト史研究の二、三の問題点 — 1963年度ロシア史研究会大会報告をめぐって」1964年、299頁)。この不毛の実例は、「レーニン論についてのコメント二、三 — 初期レーニンの諸問題」(1972年、352-357頁)において、リチャード・パイプスのレーニン論を素材に語られる。氏によれば、パイプスのレーニン論のみならず、「ヒルのレーニン論、カーの革命史にさえみうけられる西欧学者(ソビエト及び日本の学者をふくむ)の迷妄の根強さは一朝一夕のものではないのであって、ロシアの内側から、当時のロシアの諸条件をふまえて、操作対象の側から問題を見なおしてゆく困難かつ不可能に近い道をさけて(多くはそのような道のありうることにすら鈍感なまま)、近代西ヨーロッパの政治、経済、社会の所産と信じられている諸

価値を尺度にした「歪みの摘発」をもって能事足れりとしている仕事が多過ぎる」のである(357頁)。²⁾そこで、このようなことにならないためにこそ、研究主体(われわれ)と研究客体(歴史事象)のあいだの緊張関係、言葉をかえていえば、歴史認識における即時的認識(当時の状況と主体の重視)と、対象化的認識(今日の状況と主体の重視)の関係を意識することが必要になるのである(「ロシア史研究会大会雑感 — 第一次ロシア革命」348頁)。

III

1. さて、研究者が、みずからと研究客体との緊張関係を自覚したとしても、それだけでは十分ではない。なぜなら、相互関係それ自体もまた、両者の位置や状況が常に流動する以上、固定的なものではありえないからである。したがって、両者の緊張関係の内実についても、不断に自覚的に点検することが求められる。この自覚と点検が欠けている場合には、たとえば、現代における政治・社会状況が、従来の研究成果を生みだしてきた政治・社会状況と大きく異なってしまったにも拘わらず、そのことに無自覚であいかわらず旧来の発想や思考の枠組みに安易に依拠し続け、その結果、およそ現状にそぐわない歴史研究が後を絶たないことになる。田中氏は、このような傾向に対しても、深く鋭い批判を展開する。歴史家の自覚それ自体を、現代と過去との絶えざる緊張関係の中でとらえようとする田中氏の立場は、戦後の著名な論争においても、独自の発言、独自の立場をとることを可能にした。それは、たとえば、「歴史家の人間のとらえ方」あるいは「わが国における西洋史研究のあり方」をめぐって展開される。

2. すでに指摘したように、「歴史のなかの人間」という主題は、歴史の研究・教育に携わったときから田中氏が一貫して懐いていた根源的な問いの一つであった。氏は、「歴史のなかの人間像 — 歴史家は人間をいかにとらえるか」(1960年、276-284頁)において、いわゆる「昭和史」論争を受けて、「最近のわが国の歴史叙述のなかで、人間がどう描かれているか、またどこに問題があるのか」を考察している。氏の考察の出発点は、「今日、われわれの追求している広義のサイエンスとしての歴史学は、とうぜんのことながら、歴史の物語ではなく歴史の法則性の解明が主要なテーマとなっているのはいうまでもない」というところにおかれる。そこでは、「人間不在の分野が生まれてきたとしても、べつに不思議はなく、これを一方的に「人間物語」に還元しようとすることは問題の解決にはほどとおいことといわなければならない」。また、「もしも、法則性の追求を放棄することが「人間の歴史」の復活を保証する代償でなければならないとしたら、われわれはそうした要求に一顧をもあたえる必要はない」のである(277頁)。こう考える田中氏は、「歴史学における法則性がどのような人間参与の形式と内容によって実現するのか、歴史学の法則性の深まりと発展とはいかなるものかに問題の焦点がある」と主張する。つまり、法則性の探求を一つの目標として設定しつつ、同時に、人間の主体的な活動を積極的な要素として評価し、位置づけるための方法と論理を探求する方向へと、問題を再設定するのである。では、再設定された課題を追求するのに必要なことは何か。それは、通常考えられがちである方向とは逆に、「伝統的な、物語としての歴史叙述

と、広義のサイエンスをめざしつつある歴史学との徹底的乖離を促進させることであり、しかも一人の歴史家の内部でこの両極を両極として同時に把握し、その対立関係のなかで仕事をすすめること」であると結論づける(277頁)。昭和史論争が「論争当事者の双方にとって、不毛のままで終わっているといってもいいすぎでは」ない理由は、「当の歴史家の側に、亀井氏のだした問題(『昭和史』には支配階級と革命勢力しかなく、中間にあって動揺した国民の姿が描かれていないという問題 — 引用者)をこなすだけの姿勢が今日になっても(1960年 — 引用者)いまだ生まれてきていない」からなのである(278頁)。ここでも、研究者が、従来の問題設定に安易に依拠し、自らのおかれている状況を批判的に再検討しようとしないうちに、厳しい批判が向けられている。法則性の追求を一つの課題とするのは誤りではないが、獲得された法則を絶対的なものと考えたら、仮にある人物をそのなかに位置づけようとした場合、その人物が、歴史の発展にどのように、あるいはどの程度貢献したのかという観点からのみ評価されることになりがちである。歴史家が、「既製のモラルを適用して人間を安易に評価しすぎる弊害」や、「歴史家の人間把握がいまだにモラリッシュな次元から一歩も踏みだしていない」(280頁)原因のひとつが、ここに由来するであろう。このように問題提起したうえで、田中氏は、問題の核心に迫っていく。

そもそも、歴史学が人間をとらえようとする場合、文学とは異なった難しさがある。田中氏によれば、文学においては、人間の描出は「作者と人間対象との精神的対決」、「描く人と描かれる人との魂の格闘」、「究極のどこ

ろ一対一の対決が問題」である。しかし、「歴史家にとっては、一方の極におのれの歴史観、歴史像があり、これに対する他方の極に群、共同体、階級、民族、さらにはマスとエリートといった集団的複数の人間関係があり、この両者の対決、格闘こそが第一義的な意味をもってくる」。したがって、「歴史家にとっては、歴史像の、あるいはまた複数の人間関係の一環としてとらえた場合に、はじめてその人物の意味を問うことが可能となる」。歴史家は、「強固な歴史観を媒介することなくして、あるいはまた、複数の人間関係のなかで人物を位置づける自覚的操作なくして」「歴史的人間」をとらえることはできないのである(280—281頁)。だが、氏によれば、実際にはその自覚が欠けている歴史家が多く、それは実証の意味についても誤解を生んでいる。

実証的操作のもつ意味を論じて、田中氏は、「探索行為＝前提段階(その人間の経歴と著作のすべてを調べあげる実証的操作 — 引用者)をそのまま歴史のなかの人間把握と勘ちがいしている実証史家の大群が存在して、われこそは正統派なり、というつらがまえをしている状況は悲惨というほかない。ここには、歴史観、歴史像の媒介的役割がはいりこむ余地がなく、いたずらに精緻な平面描写が、読者の退屈をよそに横行かっぼすることになる」と述べる(282頁)。その結果、歴史上の人物について「真に語り得る権利と資格をもつものは、かれの全著作と行動の些末にいたるまで通曉した者に限る」ということがしばしばいわれることになる。田中氏はこれを、断簡石墨主義、些末主義と辛らつに揶揄する。いうまでもなくこれは、多くの著作や行動を研究する必要がない、という意味ではない。

そうではなく、歴史家が、自らの歴史観、歴史像を強く自覚することが人物研究の必須条件となるのであり、いくら詳細な研究をおこない、いくらたくさんの著作を読んだとしても、それだけでその人物の著作や行動の意味が明らかにできるわけではない、といっているのである。「ことは算術ではないのである」(284頁)。また、このような自覚的な態度がなければ、「書かれざる真実」に配慮する姿勢が生まれず、したがってそれに直面したとき、既成概念で当面を糊塗するか、判断停止に陥ることになりがちである、と氏はいう。ここでは、人物を歴史のなかでとらえるときにも、歴史家が自らの歴史認識を自覚することの必要性が強調されているのである。³⁾

3. 敗戦後十数年、わが国の政治は冷戦と東アジアの政治的激動のなかで、種々の大衆運動とともに複雑に展開した。なかでも1960年の安保闘争は、わが国の歴史における最大の大衆運動に発展した。その運動の高揚をうけて、1960年9月に、「もはや「戦後」ではない」のであり、すべからく多数の歴史研究者が、近代史・現代史を研究対象とすべきであるというよく知られた提言が、吉岡昭彦氏によってなされた。⁴⁾ 吉岡氏の主張は明快であり、「地主的土地所有の廃棄、日本社会の近代化によって、封建制の問題、資本主義成立史の問題が当面の直接的な課題ではなくなった」のであり、今後の歴史学のもっとも重要な研究対象は、近代社会＝資本主義社会そのものである、したがって、多くの研究者がこの課題に従事すべきである、というものであった。⁵⁾ 前述したように、田中氏は歴史研究の目標を「未来への確信と行動指針の確立」においており、この点では吉岡氏と同じであろう。

実際、1961年4月の論考「歴史認識の現代的時点について」において、田中氏も、多くの研究者が資本主義の研究にあたるべきことを否定してはいない。しかし、田中氏は、「それ（資本制社会の独占段階の歴史事象 — 引用者）を追求するおのれ（かれがおかれている歴史的諸条件を含む）との緊張関係を抜きにしては、ふたたび不毛の隘路に逢着することは必定であろう。舞台はかわっても、俳優は同じに過ぎないのである。」と警告する。田中氏は、「古代といい、中世というも、同時代人にとっては、それが現代であったのではないのか」という立場から、「重要なことは、歴史研究者の大半が現代史研究に動員されるのではなく、研究対象という城壁をなかにはさんで同時代人の心と眼を内部に据え、おのれといういつかは同じように外部（未来）から規定を受ける者の心と眼を外部に据えて対象の歴史的意味を執拗に問いかける張りつめた営みにあろう」と指摘し、さらに続けて「いわば、存在の側からみた意識が、はたまた意識の側からみた存在が意味をもってくる主体的な弁証法に客観主義はあり得ないのである」と明言している(286頁)。これまで田中氏の思考を追ってきたわれわれには、この発言の真意が理解できる。認識主体としての研究者自身が、研究客体としての歴史的事象との緊張関係を鋭く自覚することが前提で、そこから導き出される思想的営為こそが歴史研究の本質であることを強調しているのである。吉岡氏が実践的な面から研究対象の移動を提言したのに対して、田中氏は、それを否定しながら、歴史研究に関して、より根源的な面から注意を喚起したのである。種々の論争のなかで行われたこれらの発言に、田中氏

の考える歴史研究の本質が示されているといえよう。

4. では、主体的弁証法あるいは主体的発想とは、いかなるものなのか。田中氏によると、主体的発想は、「当事者の視点と、記録者の視点と、私の視点と、この三つの視点をそれぞれ支えている三つの歴史的状況が、あとう限りの実証によって、素材として提供されること」を必須前提とする。これら三者の視点はしばしば混同されているが、主体的発想とは、「本質的には重なり合わせることも統一することも不可能であるかもしれない三つの視点を、何とか未知の座標軸を立てて脈絡づけていこうとする試行錯誤的な歩み出し」にほかならない（『思想史研究の論理化のために』292－293頁）。したがって、「当分のあいだ主体的発想にきまった方向はあり得るはずがない」のであり、そうである以上、退廃的な、虚無的な、不毛の発想が、オーソドックスとされる発想と同等の、あるいはそれ以上の有効性を発揮することもあり得るのである（293頁）。これら三者の視点を区別することによって、当事者と記録者との関係からは、意識的に捏造された偽の史料の問題や、不可避免的に発生する「書かれざる真実」の問題などが派生してくるし、記録者と私との関係からは、自分にとっての歴史の意味の問題などが派生してくるのである（292－293頁）。

これらの事情を踏まえた研究のすぐれた実例として、田中氏は、1962年のロシア史研究会大会における中国思想史研究者近藤邦康氏の報告をあげている。「ロシア革命思想史研究の方法論的反省」と題されたシンポジウムにゲストとして招かれた近藤氏の報告について、田中氏は、「近藤氏の主体的発想を支える論理か

ら、竹内好氏の魯迅研究・中国研究との徹底的な対決のあとを感じたのは私だけではあるまい。そこでは、魯迅の生きた歴史的状況と、竹内氏の生きた研究状況と、近藤氏の生きつつある問題状況とが、あたかも三枚のネガフィルムを同時に焼きつけたような、複雑でしかも脈絡のある明暗像を浮き出させているのである」と評価する（『思想史研究の論理化のために』291頁）。ここで確認し、強調しておかねばならないのは、田中氏にあっては、歴史研究における主体的発想は最も重要なものであっただけではなく、それは学問的厳密さと矛盾・対立するものではないと考えられていることである。だからこそ、「思想史研究の『学問的厳密性』と『主体的発想』とは、それほどかけはなれた別次元の問題なのであるか」という問題提起が可能となるのである（288頁）。

主体的発想に基づく研究の実践例として、もうひとつ、第Ⅰ部に収められている田中氏自身の論文「1382年の汗軍モスクワ襲撃考 — ドミトリー大公とモスクワ蜂起」をあげることができよう。ここで田中氏は、種々の年代記叙述の異同を丹念に追いつつ、同時にその異同が生まれた理由をも考察することで、1382年の事件の諸相を明らかにしようとした。主として修道士によって書かれた年代記では、同一の出来事や事件について、保護者である政治勢力の利害に合わせて種々の叙述がなされ、ときには出来事そのものが黙殺されることもある（『書かれざる真実』の一例）。政治勢力つまり保護者が入れ替われば、不都合な叙述はしばしば書き直されるし、ときにはそのような書き直しが何度も繰り返される。そこで、ある事件を追究しようとしても、先述した三者の視点を堅持しない限り、何が事

実であったかを明らかにすることができないのである。その手続きを経ないで「事実」を語るなら、それはしばしば、根拠のない、単なる主観的な物語となってしまうことになる。

IV

1. 歴史家に要請されるこれら一連の課題を、世界史像の形成という問題のなかで検討したのが、「歴史学と「世界史教育」」(1971年、308-344頁)である。ここで田中氏は、上原専祿氏(1899-1975)の世界史像あるいは世界史認識に関する主張の骨子を詳細に検討している。しかし、豊かな研究史があり、きわめて内容豊かなこの主題について論じることは、小稿の筆者の能力と小稿の課題をはるかに超える。ここでは、これまで述べてきた歴史研究のあるべき姿という観点から、田中氏の叙述に沿いながら、世界史認識の問題について、ごく簡潔に述べるにとどめたい。

田中氏によれば、「歴史意識」、「歴史像」、「歴史認識」といった諸概念は、いまでは普通に用いられているが、それらは1950年代前半頃まではほとんど問題にされておらず、上原氏が使用していたにすぎなかった。したがって、これらの概念は、もともと「歴史科学」(法則性重視の歴史学)とは縁の薄いものであった。当時圧倒的な意味をもっていたのは、「法則」、「諸段階」、「社会構成体」という史的唯物論の概念であって、これらは、「発展」とともに問題提起の武器であった。重要なのは、これらの諸概念が、「研究者一人一人の主体に絡みついてくるぬきさしならぬ歴史概念としてではもちろんなく、むしろそうであってはならぬもの」とされていたことである(313頁)。この点については、史的唯物論の客観性重視の立場に絡めて、小稿でもすでに触れた。

その後、これらの概念は、しだいに「図式的な概念実体」に転化し、概念自体の歴史性・抽象性が歴史の「認識論」の問題として問われることさえほとんどないままに推移し、まもなく政治的諸原因による歴史研究の混迷のなかに埋没しそうな状況になっていった(314頁)。こうした1950年代半ばの思想的閉塞状況のなかで、それを突破する手がかりの一つとして、上原氏の諸概念が省みられるにいたったのである。しかし、歴史科学の側は、上原理論を自己の課題にひきつけて検討することがなく、主体性重視の歴史学として排除してしまった。田中氏によれば、マルクス主義の側の対応は、結果的に、「歴史研究の歴史性を歴史研究の政治性でせきとめる」ものだったのである(316頁)。

2. 今後の世界史研究の前提課題のひとつとして、田中氏は、歴史意識と「科学」概念の再検討という問題を取り上げ、それは、一方で「特殊日本的な課題」を生み出すとともに、他方では、「インターナショナルな課題」を生み出すという二重の構造をもっていることを指摘する(327頁)。⁶⁾ 前者の課題は、前述の検討問題が「われわれ自体の意識変革の問題を内蔵しているという意味から」生じてくる。重要なのは、田中氏が、歴史意識の変革を、学校教育による「知的なレベルでの歴史意識の変革」ととどめることなく、「われわれ自身の生活の仕方、その生き死にのあり方にまでひびきかねない歴史意識(歴史にたいする思考および感覚のパターン形成の原点)の変革」でなければならないと考えていることである(327頁)。この問題を考察するために、氏は、「われわれの周囲で日常的・大衆的に見聞できる歴史意識の三類型」をまず析出する。第一

に、古代国家の統一時から存在する「政治的歴史意識」、具体的には立身出世の成功者の伝記を好むような志向性をもった歴史意識があり、第二に、平安末から鎌倉初期にかけての動乱時代に現われたと思われる「有為転变的歴史意識」、つまり「歴史における強者・権力者の栄枯盛衰・有為転変 — とくに悲劇に終わる終末を当然のこととして受け入れる心性に裏打ちされた歴史意識」がある。これは、「なるようにしかならぬ」、あるいは「なんとかなるさ」といった表現に示されるような、諦観＝絶望がそのまま強靱な楽天主義に転化するような自然発生的歴史意識（知的認識を媒介としない）で、きわめて広範な潜在力をもっている。そして第三が、「進歩発展的歴史意識」とでもいうべきもので、歴史は進歩・発展するものであり、それに「参画することこそ真に歴史を生きることにほかならないとする歴史意識（知的認識を濃厚に含有している点ではむしろ歴史観）」がある（328－330頁）。これは、「明治国家の創成期に流入した西欧的な歴史意識の決定的な影響下に明治大正の文教政策によって根づかされたもの」である。氏は、それまでの日本人にとってまったく異質であったこの進歩発展的歴史意識が、支配層と民衆の両側に急速に浸透しえたのはなぜかと問い、ひとつには、明治国家の基礎が固まった時期が西欧世界の相対的安定期に当たっていたために、西欧・西欧思想を実際以上にモデル化することになったこと、しかしより重要なのは、先述した第二の歴史意識のような「すべての変化に対する鋭敏な感覚的認識能力の伝統が民衆レベルで広範に存在してい」たことである、とする（331頁）。日本人の歴史意識に関する田中氏のこのような

把握がどの程度妥当するかは、ここでの問題ではない。重要なのは、氏が、日本人の歴史意識の現状を歴史的な文脈で把握しようと努めた理由である。それは、「国民的なレベルでの歴史意識の変化が問題となる以上は、どれほど欠陥に満ちていようとも、いまのわれわれ自身の多元重層的な歴史意識の内的エネルギーによる以外はその根本的な立て直しは不可能だ」という認識があるからである（332頁）。小稿の筆者には、問題を常に自らの認識の再検討と関連づけて理解しようとする、この厳しい姿勢にこそ、田中氏の歴史研究からわれわれが学ぶべき、一つの重要な点があるように思われる。⁷⁾ このような仕方の問題を設定しない限り、いかなる問題であれ、将来の展望が切り開かれることはないであろう。

3. われわれ自身の生き方と関連させて歴史を理解するということの大切さについて、田中氏は、先にもあげた最新の論考「人間の顔をした歴史研究を」のなかでも、地域史の理解ということに関連させて、次のように述べている。「仮りに地域史を世界史と自国史（＝一国史）のあいだに位置するものとみなすならば、“東アジア史”“地中海世界史”“中・近東史”といった枠組み自体は、枠組み設定の意図こそそれぞれにことなるとしても、とりあえずは理解できる。しかし、地域史を認識主体である自分自身にかかわらせて、生活の客観的場であると同時に歴史にたいする積極的な働きかけの場でもあるような、しかも世界、国家、民族と不即不離の關係に立つ伸縮自在な自立的枠組みとしてこれをとらえるならば、ことはそれほど容易ではない」（「人間の顔をした歴史研究を」362頁）。つまり、地域史というものを、あくまでも学問的な考察

のための一つの枠組みと割り切るならばことは容易だが、しかし、自分自身の生活の現場・現実と結びついたものとしてそれを考えてみれば、想定されている地域史をすんなり受け入れることができるか、と問うているのであろう。

おわりに

われわれはこれまで、1956年から1990年にいたる田中陽児氏の10編の論考を読み進めてきた。折に触れて執筆されたため、一見すると断片的であるように見える田中氏の論考の根底には、鋭い問題意識と深い思索に支えられて、歴史の研究についての強靱な論理が組み立てられていることが明らかになったように思われる。

田中氏の議論は、第一義的には国民国家の枠組みを前提としている。「国家の枠組みを超える」あるいは「国民国家のフィクション」などについて、近年、多くのことが語られてきた。その立場からみれば、田中氏の立論はいまや古めかしく、省みる価値の無いものになったとみえるかもしれない。しかし、そのように考える向きがあるとすれば、それはいささか早計であろう。国民国家の枠組みを前提としたことは、氏の立論の弱点ではない。現在ではたしかにグローバル化が急速に進行しているが、国民国家が現存する以上、いまのところグローバル化も国民国家の枠組みを媒介してしか作用しえない。また、より重要なのは、急速に進行してきたグローバル化が、「エゴイズムと摩擦につながる、たがの外れた競争の風潮」（2015年8月15日 韓国におけるミサでの教皇フランシスコの言葉）をあおり、その結果、しばしば多くの人びとの生活と、その拠り所となっていた伝統的な社会構造と

文化を破壊しつつあること、そして、その貪欲な資本主義の脅威から人びとを守る権力を有しているのは、結局のところ国民国家の政府のみであるという客観的事実である。したがって、グローバル化の時代だからこそ、国民国家の役割と意義について再評価する必要があると小稿の筆者は考える。またすでにみたように、田中氏自身が、もちろん冷戦の終結という文脈においてではないが、1971年の時点でグローバル化の進展を見通していたことをもういちど想起しよう。田中氏も、わが国と世界の状況の変化に無自覚だったわけではなく、それを見越したうえで、わが国独自の課題を考えていたのである。

さらにわが国の現状からも、田中氏の立論がいまなお有効である根拠を示すことができる。田中氏が最初の論考を発表した1950年代半ばには、わが国はすでに「逆コース」を歩み始めていた。それからさらに60年の歳月が流れ、わが国およびそれを取り巻く状況は大きく変わった。たしかに、ソ連の消滅に直接の端を発するグローバル化の急速な進行は、わが国を取り巻く状況をますます混迷させているかにみえる。このように不透明かつ不安定な状況下で、「未来への確信と行動指針」を確立するのは、とうてい不可能であるようにみえる。もしこの印象が事実なら、田中氏の論考は、社会変革の希望をもちえた時代の過去の論考として省みられなくなるだろう。しかし私見によれば、そのような評価はやはり誤りである。まず、わが国の政治・経済・社会は、表面的にはいかにも激変したようにみえるが、その基本的な構造は、実は日米安保条約締結（1951年）以来、いまにいたるも基本的に変っていない。これは主観的な評価

ではなく、その気になりさえすれば、誰にでも容易に確認できる客観的な事実である。別の言い方でいえば、わが国は、アメリカ合衆国の「指導」の下に、いまなお1951年以來の「逆コース」を歩み続けているのである。政治・経済・社会構造がこのような状況であるから、「未来への確信と行動指針」を確立することを歴史学の目標の一つとするのなら、歴史学に要求される課題は60年前と基本的に変わっていないといえよう。⁸⁾もちろん、新たな課題が加わることはあるにちがいない。しかしその場合でも、歴史研究者がまずなすべきなのは、田中氏が主張したこと、つまり、それぞれの研究者が、現代におけるみずからの位置と研究対象との緊張関係を認識するとともに、そこから生まれてくる自らの研究の意味を常に点検することであろう。いかに混迷しているようにみえようとも、「未来への確信と行動指針」を確立することが不可能になったとは思われぬし、ましてや歴史学からその能力が失われたとはなおさら思われぬ。もし将来を見通せなくなっているとすれば、それはただ単に、われわれの考察が弱く、認識能力が摩滅しているだけのことである。田中氏の言葉をもじっていえば、「歴史研究を成り立たせている既成の方法＝ルールがどこまで摩滅し、腐蝕して使用に耐え得ないものになっているかをあきらかにしないで、何の歴史研究であろうか」(「思想史研究の論理化のために」289頁から)。

小稿では、本書に収められた田中陽児氏の論考のごく一部しかとりあげることができなかった。その他の諸論考も含めた、田中氏の研究と思索の全体像についての検討は、別の機会に譲ることにしたい。

註

1) 長くなるが、本文で省略した、歴史家という「歴史認識の個性性」に関する箇所も含めて、関連部分の田中氏の叙述を、そのまま引用しておこう。「一般的にいて、歴史の真実をつきとめるのは自分たちののだ、という秘かな、あるいは公然たる自負に支えられた職業的歴史学者にたいして、きわめてクールな対応に終始し、時に証言を拒否する無名の民衆(＝歴史の現場で生きてきた人びと)が、いつの時代にも不斷に広範に存在すること——このことを軽視した研究に“歴史”はない。

主体的な地域史研究に限らず、歴史の被制約性と人間の主体的活動力の葛藤こそ、歴史展開の原動力であろう。しかし、歴史研究のなかで“変革主体の形成”とか、“共同体の主体的再編成”といったテーマがいくら強調されても、それは、その歴史の現場で、志を同じくする人と人との新しい関係が生まれ出てきたということであって、当然ながら研究者自身とは直接のかかわりはない。良し悪し優劣の問題ではなく、認識主体の歴史的問題性をぬきにしても成り立つ歴史認識(圧倒的に多い)と、そうではない歴史認識とがあるということである。そのうえで、歴史家というものの現代における意味と役割と位置を考え直してみたい。歴史家とはいったい何者なのであろうか。多くの場合、自覚や歴史認識のいとまもなく、ましになろうと懸命に生きて流されていく人びとによって、歴史がつくられていく。歴史家は例外なのであろうか。さらにまた、歴史事象自体は、ほとんど

の場合、総合的な関係性にいろいろられて、人びとの複合的な体験として展開する。それにもかかわらず、歴史認識の個性性は、ヘロドトス、司馬遷の昔から消え去ることがない。厄介なのは、この個性性が歴史とともに変化し、変質し、ついには学問にとってかわられ、そのなかに消失したかにみえることである。しかし、本当にそうだろうか。そしてまた、なぜそうでなければならないのか」(363頁)。

2) ここで指摘されている西欧の研究者の深刻な問題点については、ジョゼップ・フォンターナ／立石博高・花方寿行訳『鏡のなかのヨーロッパ―歪められた過去』(平凡社、2000年)が必読である。

3) 「歴史のなかの人間」あるいは歴史家によるそのとらえ方という課題について、具体的な人物を素材に田中氏が実践したのが、第Ⅰ部の専門論文では、「ニコンの「宗教改革」―ロシアの帝権と教権の一断面」(1961年、5-34頁)であろう。この論文が、専門研究としては最も古く、氏のロシア史研究のいわば出発点となっている。氏にあっては、「歴史のなかの人間」に対する関心が、その最初期から強くあったことを改めて確認させる。またこれ以外に、第Ⅲ部に収められた7編の書評も多かれ少なかれこの課題を追求しており、これらの書評の不変の価値がそこにある。和田春樹氏の著作はすでに定評のあるものだが、小稿の筆者がとくに興味深く読んだのは、ナロードニキの活動家として著名なヴェーラ・フィグネル(1852-1942)の自伝『ロシアの夜』(筑摩書房、1961年)と松田道雄氏の『ロシ

アの革命』(河出書房新社、1970年)の書評である。後者についてのみいえば、松田氏は1960年代に多面的な活動をおこなったが、そのロシア思想史研究に対する評価は、当時は必ずしも高くなかった。しかし、ソ連の消滅と、それに伴う多数の極秘資料の公開という研究史の新段階に立って、改めて松田氏の著作と田中氏の書評を読めば、松田氏の著作が、いまなお価値を失わないものであることがわかる。アカデミズムの世界も含めて、当時公刊された多くのロシア革命史研究が、結局のところ政治集団や政党の歴史、とりわけ前衛党の「成長・発展」の歴史によって代替される傾向が強かったなかで、松田氏のロシア革命研究が、あれこれの「権威」とは関係なく、自らの批判的問題意識に依拠して対象を描ききったという点で、いまこそ読み返されるべき著作であることがよく理解できる。

4) 吉岡昭彦「日本における西洋史研究について―安保闘争のなかで研究者の課題を考える」『歴史評論』121号(1960年)。

5) 吉岡昭彦、前掲稿、6、9、12頁。

6) 少々長くなるが、田中氏の言葉をそのまま引用しよう。「歴史意識と「科学」概念という二つの研究対象の相互連関性は、一面ではそれぞれの内部での意識と実在の相互規定関係がまずあってその自乗された問題としてあらわれるにすぎないが、その反面でわれわれ自体の意識変革の問題を内蔵しているという意味から特殊日本的な課題が一方に生じ、しかもそのような意識変革が、資本主義、社会主義あるいは中間的・混合的・過渡的体制の如

何を問わず、科学技術への志向性あるいはまた合理主義的な政治・経済・社会への志向性がいまなお肯定的に展開されつつある世界のただなかで行われざるをえないために、グローバルな現代文明の問題性にどうしても突きあたるという意味で、おそかれ早かれ、どここの国、どここの地域でも問題となるであろうところのインターナショナルな課題が他方に生じてくるという二重の構造をもっている」(327頁)。

- 7) 和田春樹氏は、本書に収められた「田中陽児氏の人と学問」において、「田中氏は問題とを感じる対象に向かうとき、たえず自分の内部を見つめ直す。この一貫した姿勢に私は打たれた」と述べている。自らを問い直すという厳しい姿勢は、氏において、一貫したものだったのである。
- 8) これに関連して、吉岡昭彦氏の所論に対する反批判のなかで述べられた堀米庸三氏の次の発言は、ことの本质をまことに鋭くついたもので、われわれがいまこそ痛切に噛みしめるべき言葉であろう。「私が安保条約に批判的であるのは、それがわれわれに自主的な理想の確立を妨げると感ずるからである。人におけると同

様、国の再出発にも一番大切なのは、明確な理想の保持である。われわれがかつてかかげた理想は、事情の変化と国の存立という理由で、無残にも曲げられてしまっている。敗戦によって道徳的崩壊をとげたわが国民が、新しく立上るべくしてえた理想がまたしても否定されるとき、そこに生ずる道徳的退廃の深刻さは、敗戦そのものより更に一層深刻である。理想なく道徳ないところに国民も国家もない。こうして私は安保による危機をまず国民の道徳的危機として意識するのである」。堀米庸三「総合的歴史観への一提言 — 吉岡昭彦君への答にかえて」『歴史評論』123号(1960年)12頁。なお、敗戦後まもない早い時期に、アメリカ人に対する日本人の態度の豹変をみて、日本人のアイデンティティの分裂について鋭く指摘していたのが、作家の山田風太郎であった。拙稿「わたしたちの歴史とどう向き合うか — 1945年夏の記憶 — 」短編小説の会編『緑陰のつどい』(2012年、非売品)169頁。あるいは、「自国の歴史とどう向き合うか(続) — 1945年夏の記憶 — 」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第7号(2006年)54頁。

略年表

年	出来事	時代の主な特徴
1945年	日本の敗戦	民主主義の高揚期（～50）
1946	日本国憲法公布	
1949	高等学校で、新科目「世界史」の教育が始まる	
1950	朝鮮戦争（～53）	政治の反動化の始まり
	コミンフォルム批判と日本共産党の分裂（日本共産党50年問題）	
1951	サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約調印 第三次吉田内閣による一連の「逆コース」	
1953	朝鮮休戦協定	「第三世界」の自立へ
1954	周恩来とネルーによる平和五原則	
1955	アジア・アフリカ会議、平和十原則 高度経済成長（～73：第一次石油危機） 日本共産党第六回全国協議会（六全協）で共産党の統一	
1956	スターリン批判 昭和史論争	ソ連の「停滞の時代」 (70年代～82)
1960	日米安保条約改定、安保闘争 中ソ対立の顕在化	
1961	第1回非同盟諸国首脳会議	
1964	ブレジネフソ連共産党第一書記就任（～82） 東京オリンピック	
1965	中国で文化大革命始まる（～77）	
1968	「プラハの春」、チェコ事件 明治百年祭	
1985	ゴルバチョフソ連共産党書記長就任	
1987	ソ連でペレストロイカ開始	
1989	ベルリンの壁崩壊、マルタ島で米ソ首脳が会談	
1990	東西ドイツの統一	
1991	ソ連邦消滅	